唾液瘻ノ「レントゲン」照射療法ニ就テ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30887

唾液瘻ノ「レントゲン」照射療法ニ就テ

金澤醫科大學石川外科教室（主任石川教授）
室生助信

唾液瘻ハ外傷殊ニ銃創、刺創ニヨリテ來リ時トシテハ腫瘍、黴毒、結核、水癌等ノ手術後ニモ來ルモノニシテ、瘻孔ガ口腔内ニ開口スルカ否カニヨリ、内唾液瘻、外唾液瘻トニ分タル。内唾液瘻ニヨル障碍ハ比較的少キモ、外唾液瘻ニ於テハ唾液ガ常ニ顏面ニ流出スル爲ニ局所ノ濕潤、糜爛、濕疹ヲ來シ常ニ不快ノ念ヲ抱キ常ニ快々トシテ樂シマザルハ既知ノ事實ナリ。

元來唾液瘻ハ耳下腺、顎下腺、舌下腺ノ内最モヨク耳下腺ニ來リ、腺自身ノ損傷ニヨル場合、排泄管ノ損傷ニヨル場合トニヨリ臨床上其ノ經過ヲ異ニセリ。

即チ耳下腺自身ノ損傷ニヨル場合ハ、豫後可良ニシテ多クハ容易ニ治癒シ、自然治癒スル事モアリ。然レドモ排泄管即チ、ステノン氏管(Ductus Stenoni)ノ損傷ノ場合ニ至リテハ其ノ治癒困難ニシテ、特ニ唇狀瘻ヲ生ジタルモノニ於テ然リトス。

此ノ不幸ヲ救フベキ療法中、古來廣ク行ハレタルモノハ瘻孔ノ腐蝕法、燒灼法、手術的ニハ消息子ニテ排泄管斷端ノ連結法、外唾液瘻ヲ内唾液瘻ニ變ズル法、及ビ腺内排泄管ノ傷ケル時ニハ腺ノ一部切除法等多種多樣ナリ。此ノ如キ多種多樣ナル療法アルハ完全ナル療法ナキ證據ナリ。

然レドモ最モヨク行ハル、方法ハ、ルリッシュ氏(Leriche)ノ耳下腺神經拔除法、及ビ腺剔出法ナリ。然シケース氏(Kaess)ノ報告ニヨレバ此ノ神經拔除法モ其ノ効、確實ナラズト云フ。

其ノ理由ハ耳顳顬神經ノ耳下腺ニ分布スル神經枝全部ヲ拔除スル事甚ダ困難ナル爲ナリ。又耳下腺剔出法ハ腺ニ病的變化ノアル場合顏面神經トノ癒着アル爲ニ剔出スル際、顏面神經ヲ傷ケル恐アリ。

然ルニ近時唾液瘻ニ對シ「レントゲン」照射療法ヲ應用シ好結果ヲ得タル報告アリ。卽チ一九一七年、フレンケル氏(Fraenkel)ハ耳下腺ノ銃創治癒ガ唾液ノ爲障碍サレシ場合ニ「レントゲン」照射ニ依リテ其ノ治癒ヲ早メ得タリ。尙又同氏ハ一九二三年嗜眠性腦炎ノ患者ノ流涎ニ此ノ療法ヲ行ヒ著効アリシト云フ。

其ノ他一九二三年クラインシユミツト氏(Kleinschmidt)ハ二例、ケース氏ハ一例、岩永氏ハ一例、唾液瘻ニ此ノ療法ヲ行ヒ、完全ニ治癒セルヲ報告セリ。

此ノ療法ニ於ケル「レ」線ノ量ハ唾液腺ノ「レ」線ニ對スル感受性各人ニヨリ異ルタメ一定セズ。

フレンケル氏、クラインシユミツト氏等ハ一回大量ヲ照射シ、一乃至二回ノ後ニ全ク分泌停止シ、瘻口閉塞セリト言ヘリ。岩永氏ハ比較的小量ヲ數回(六回)用ヒテ成功セリト報告セリ。

余ハステノン氏管ノ唾液瘻ニ對シ七回ノ「レントゲン」照射ヲ行ヒ完全ニ治癒セシメ得タルヲ以テ此ノ一例ヲ報告シ、大方ノ叱正ヲ乞ハントス。

患者　六十二歲、女。

主訴　左頰部ノ腫瘍。

家族的關係、及ビ既往症ニ於テ特記スベキモノナシ。

現症來歷　昨年八月始メ食事中ニ誤ツテ硬キモノヲ嚙ミタル後、左耳下腺部ニ少シ腫脹ヲ來セルヲ知レリ。然シ疼痛、發熱ナク、唯咀嚼運動少シク障碍サレタレドモ這ハ其ノ後數日ニシテ消失セリ。然ルニ腫瘍ハ漸次增大セリ。

當時患者ハ左耳下腺部ニ鷄卵大ノ腫瘍ヲ有シ、之ガ口腔內ニ浸潤セルヲ認メタリ、腫瘍ハ疼痛ナク移動性ヲ缺キ、表面滑澤ニシテ觸診スルニ餘リ硬軟種々ノ部アリ。

左頰部ノ混合腫瘍ノ診斷ノモトニ十一月三十日、手術ヲ行ヒタルニ、腫瘍ハ耳下腺ヨリ起リ、下顎骨及ビ關節ヲ著シク浸シ、顎下腺ヲモ浸セリ、而シテ顏面神經ト强ク癒着セル爲ニ顏面神經ヲ一部分傷ケザルヲ得ザル狀態トナレリ。

腫瘍ヲ剔出シ其ノ浸潤セル部ヲ「パツケラン」ニテ燒灼シ縫合閉鎖セリ。

手術後輕度ノ顏面神經痲痺アリ。

術後五日拔糸。第一期癒合ヲ營ム。

十二月六日(術後六日目)拔糸セル一部ヨリ分泌物アルヲ認メタリ。

十二月八日傷口ヨリ分泌物漸次增加シ唾液瘻ヲ作レリ。

十二月九日瘻口ヨリ、クルムスキー氏液(Chlumsky)注入ヲ始ム。

十二月十四日クルムスキー氏液ヲ用フル事ニヨリ唾液分泌增加ヲ認メタルヲ以テ、「レントゲン」照射療法ヲ始メタリ。（「レ」線照射ハ第一回ヨリ最後ノ第七回目マデ、三M、A、三m.m.アルミニユーム板濾過ニテ三十分間行ヘリ。）照射後患者ハ口渴ヲ訴ヘタルノミニテ他ニ變化ヲ認メズ。

十二月十九日「レントゲン」照射。

十二月二十日瘻口ヨリノ分泌物減少セリ。

十二月二十六日「レントゲン」照射（第三回目）此ノ時ヨリ分泌物殆ンドナシ。（四回目）

十二月三十一日「レントゲン」照射。

一月四日「レントゲン」照射。

一月十二日「レントゲン」照射。

一月十八日「レントゲン」照射。

以上七回ノ「レントゲン」照射療法ニテ、瘻口ハ分泌停止シ、瘢痕ヲ以テ治癒セリ。而シテ手術後ニ現ハレタル顏面神經麻痺モ略正常ニ恢復セリ。本年一月四日以來ノ照射ハ、唾液瘻ノ再發ヲ防グ目的ニテ行ヘルモノナリ。以上ノ結果ニヨレバ「レントゲン」線照射ハ唾液分泌ヲ減ズル目的ニ著効アルモノニシテ、唾液瘻ノ療法中最モ簡單ニシテ又安全ナル方法ナリ。

「レントゲン」線ノ唾液腺ニ對スル作用ハ結果カラ見レバ腺萎縮ナレドモ其ノ機轉ハ分泌機能ニ直接ニ作用スルモノト解スルヨリ、寧ロ唾液腺ノ腫脹ヲ原因スル淋巴細胞ヲ破壞シ肉芽組織、或ハ瘢痕組織ニ代ハラシムルモノト解スル方正當ナラム。腺組織ノ萎縮ニ對シテハ、果シテ叙上ノ機轉ヲトルモノカ或ハ他ノ機轉ヲ取ルモノナルカハ、例ヲ重ネテ今後ノ研究ニ依ラザルベカラズ。

何レニシテモ臨床上前陳ノ如キ効果アル事ハ最早疑ノ餘地ナキモノナリ。

稿ヲ終ルニ臨ミ御指導、御校閲ヲ忝フセル恩師石川博士及ビ横田助教授ニ對シ深厚ナル感謝ノ意ヲ表ス。

文　獻

1) **岩永仁雄**, 治療及處方, 大正十三年一月發行。　2) **藤波剛一**, レントゲン學。　3) **Kaess**, Zentralbl. f. Chirurgie, 1923, No. 25.
4) **Kleinschmidt**, München. med. Wochenschr., 1923, No. 25.　5) **Schlecht**, München. med. Wochenschr., 1923, No. 28.　6) **Kuttner**, Prakt. Deutsch. Chirurgie. Pd. 1.